

## 『遠野支署取組事例の見学（シカ个体残渣処理&TOMOK）』

11月21日に、岩手南部森林管理署遠野支署管内にて、当署管内市町の担当者とともに大型排水管を活用したシカ残渣処理設備と、とぴあ子ども木の空間木製遊具「TOMOK」の見学を行いました。

### ○大型排水管を活用したシカ残渣処理設備（遠野市土淵町西恩徳国有林）

従来遠野市内において捕獲したシカは埋設又は焼却処理をしてきましたが、捕獲者の心身への負担や、クマ等による埋設個体の持ち去りおよび捕食が課題となっていました。これを受け、遠野市、遠野猟友会、遠野支署では、3者で締結している「ニホンジカ等被害対策協定」を改定し、和歌山森林管理署等で実践されている捕獲個体の処理方法を新たに導入することといたしました。

実際の工事は、岩手県による補助金（地域経営推進費）の活用と遠野市の負担により行われていて、遠野市有林に4基、国有林に1基設置されています。円形の高密度ポリエチレン管を地上高1m、地中深さ3mの高さで埋設し、天井部に蓋を被せる設計となっていて、捕獲したシカを投入するたび「ぼかし材」を入れることで、減容と臭気の低減が図られています。10月に実装されて以降、1ヶ月ほど経過した現時点で4頭のシカが埋設されていますが、すでに骨と皮だけになっていました。猟友会の方から生の声を聞く機会もありましたが、个体処理が楽になり、今のところクマ等を誘引している様子もないとのことでした。また、クマ等による埋設個体の持ち去りおよび捕食が発生している一因として、市外からの狩猟者が十分な个体処理をせずそのまま放棄しているためであり、市内外の狩猟者を个体へのスプレー標示法により区別することで、不法投棄をしている狩猟者の摘発につながるのではないかとの貴重な意見を聞くこともできました。

今後については、導入前は想定していなかった課題である、シカの分解者として発生しポリエチレン管外まで出てきてしまうウジ虫の対策や、シカ投入後の嵩高や管内温度変化の測定などにも取り組んでいくとのことでした。近年、シカの捕獲による个体数低減が重要視されている中で、捕獲者の負担を軽減する仕組みとして、さらなる技術発展と普及に期待が高まります。当署としても、同日参加していた管内市町の担当者の方々とともに、実用の可能性について意見交換をしていきたいと思っております。



## ○TOMOK

令和6年10月5日、遠野市のショッピングセンター「とぴあ」にて子供用の大型木製遊具がオープンしました。市担当者によると、2年前に市内の産業まつりの際に簡易なボルダリングを楽しむ子供たちの姿から着想を得て建設に踏み切ったとのこと。市民からも大変人気があるようで、多い時には1日600人の子どもたちが利用していて、隣接する館内フードコートの売り上げ向上にも貢献しているほどです。建設費用としては、国の森林環境譲与税と岩手県の市町村少子化対策支援事業費補助金が、建設部材には、遠野産スギを中心とする岩手県産材が、県内の事業者による加工を経て活用されています。

特徴的な吹き抜け構造からも分かるように、広々とした空間に様々な遊具が凝縮されているのが魅力的であり、童心に帰った気持ちで遊びたくするような印象を受けました。地域で産出した木材を、地域の子どもたちのために活用する地産地消の取組の一つとして参考にし、当署管内の地方自治体や木材加工事業者とともに、木材を使った新たな町おこしの可能性を探っていきたいと思います。

参考：

[TOMOK\(とぴあ子ども木の空間木製遊具\) - 遠野市](#)

森林技術指導官 村上智  
業務G 経営・森林育成担当 大脇航平



(岩手県遠野市公式ウェブサイトより引用)

